秘密結社の語りにみる空間イメージ

— 象牙海岸，ダン族の場合 —

真 島 一 郎*

Les images spatiales dans les narrations de la société secrète: Le cas dan en Côte d'Ivoire

Ichiro Majima

Dans la région forestière de l'ouest de la côte de Guinée, la plupart des ethnies ont des sociétés secrètes d'un même type généralement appelées Poro. Chez les Dan aussi, il y a une société secrète masculine nommée *Gɔ* possédant les fonctions politiques, économiques et judiciaires comme dans le cas de Poro.

Les Dan ont de l'inclination à expliquer quelques aspects de la société *Gɔ* par le moyen des expressions verbales qui donnent des images spatiales aux allocutaires. Cet essai analyse trois images spatiales employées par les Dan de Côte d'Ivoire (région de Danané) dans les narrations de la société *Gɔ*.

Premièrement, ils expliquent l'origine de *Gɔ* par l'image concernant deux points cardinaux: *dhuö* et *sia*. Le mot *dhuö* signifie "nord", "est" et aussi "en haut". Selon la cosmologie dan, tous les êtres puissants, à savoir les Dan eux-mêmes, l'institution de *Gɔ*, les Malinké et les Européens sont "descendus" de *dhuö* (nord/est/en haut). C'est ainsi que *Gɔ* doit refuser tout ce qui est d'origine de *dhuö* sauf soi-même pour maintenir son régime actuel en pays dan.

Deuxièmement, les Dan expliquent le régime de *Gɔ* par une image centripète. Dans cet espace imaginaire, *Gɔ* est le "centre" ou "noyau" de la localité qui absorbe "ses étrangers" sans cesse. Et toute la population doit "entourer" ou "se lover en spirales autour de" *Gɔ*. Ce "noyau" représente d'abord le lignage privilégié qui est fondateur du pays et détenteur du fétiche et du statut de Grand Maître de *Gɔ*. Mais dans un sens plus profond, il signifie "le noyau du secret" de *Gɔ* même.

Troisièmement, l'autorité de *Gɔ* est exprimée par l'image spatiale de la chaîne interminable de "devant" et de "derrière". D'après cette image, tous les guerriers d'un pays se disposent en chaîne selon les degrés relatifs de "devant" – "derrière" pour défendre "le plus derrière" qui est *Gɔ*. Mais, cette même structure imaginaire existe aussi au sein de *Gɔ* en tant que chaîne officielle de "remplaçant" et de "remplacé".

Dans cette image plus essentielle que les deux premières, on doit cependant s'arrêter juste devant le dernier maillon de cette chaîne sans jamais y parvenir. Parce que ce "vrai derrière de *Gɔ*" ou "vrai noyau de *Gɔ*" est justement "l'intérieur" du "secret". Dans le vocabulaire dan, "secret" et "derrière" sont des attributs du

* 東京大学大学院総合文化研究科

même concept zü comme de zlöö dhε. Les narrations de la société secrète Gɔ chez les Dan reposent sur ces deux concepts fondamentaux et les images spatiales qu'ils produisent.

目次：0. 序

1. 結社起源：流れる方位
2. 結社体制：とぐろに巻かれる核
3. 結社権威：連鎖する前後
4. 結

Në tee ya fling bho, mε va e e bɔ dhε ye.

こどもが朝露を払ったあとで、おとなは己れの通り道を
みいだすものだ

Kluë e ziö mε gɔ, kluë ziö a gɔ pë dhö.

常人に越えまさる戦士にも、彼に越えまさるものは
あるものだ
(ダン族の諺)

0. 序

ある特権的な知識を保持する者とし不在者との間に生じてしまう、社会学的な差異の構造が、秘密結社の問題を介して人類学者の注目を受けるようになってから久しい。なかでも西アフリカ・ギニア湾岸にみられる秘密結社文化の事例は、メラネシアのそれと並び、数多くの民族誌で報告が為されてきている。だがそのうち特に、秘密結社が社会全体を組織化し、政治的な支配機能すらを持つほどの社会の考察にあたっては、結社の組織や機能の分析と同時に、「秘密」それ自体の内包する独自の問題系も、調査者には鋭敏に意識されていなければならぬ。しばしば言われる様に、秘密が、知識の「境界線」を前提とする一個の社会空間であるならば、それは必然的に現場の調査者をも巻き込まずにいらぬ複雑な問題性を孕んでくるはずである。単独の方法論では分析し難いこの問題領域に向けた、本稿はその試みの一つである。

調査者が現地の人々に秘密結社の様々な側面を質問したとき、彼らの語りに、思いがけなくも頻繁に登場してきた空間的なイメージを探ることが、本稿の具体的な論題である。本稿は、この意味で現地の空間語彙を考察の中心材料とはするが、必ずしもそれで認識人類学的な空間研究に向かうものではない。特定の社会が言語によって空間をどのように分類、認識しているかの問題よりむしろ、秘密結社の現地解釈において空間的な語彙がどのような意味を帯びるか、いわば空間的な表現

にあらわれた「権力性」の問題に重点がおかれてくるはずである。尤も本稿は、現実の社会空間の配置からその社会の権力機構を読み取る類いの研究に向かうものでもまたない。問題は、空間自体の民俗認識にではなく、空間的なイメージに支えられた、秘密結社の民俗理論の次元に存するからである。

本稿の対象となる象牙海岸のダン（Dan）族に於いて、秘密結社をめぐる現地の語りにあらわれた空間語彙は、それを聴く者に、抽象的ではあるが極めて思い浮かべやすい空間の像＝イメージを提供する。なるほど、人類学調査者が現地社会の秘密性（secrecy）を自分なりのイメージとして空間化した説明であるならば、例えばニューギニア・バクタマン社会に於ける「知識」を論じたBarthの考察が知られていよう。「我々は、バクタマンの儀礼に内包された知識が、どれだけ禁忌と秘密によって取り囲まれているかをみてきた。[…] 先に私は、バクタマンの知の構造を特徴付けるために、入れ子のイメージを用いた。即ち、その知は多様なレベルとともに構築されていて、それぞれのレベルが、次のレベルをばやかすように組織されているのである」（Barth 1975：217-218）。しかしダン族では、「秘密結社」をめぐる空間化されたイメージが、調査者のこういった洗練された「翻訳」にではなく、現地の言語表現それ自体に明確にあらわれている。そして同じ現地イメージとはいえ、例えば西アフリカ・マリの諸部族で図記号（signe graphique）として人々に描かれ、形象化されてきたような無数の

空間的イメージ (Griaule et Dieterlen 1951)とも異なり、それは専ら、ダン族が結社論理を解説するためのみに駆使する、あくまでも口頭の空間イメージなのである。

ダン族は、西アフリカの象牙海岸、リベリアの両国境部、後背地にまたがって居住し、一部の山岳とサヴェンナ地域を除くその大半の居住域は、森林地帯である。彼らは、伝統的に陸稲とマニオクの焼畑耕作を主な生業とする農耕民である。部族語のダン語は、マンデ系言語中の「南-東グループ」に属し、1975年現在、象牙海岸側で約35万人の話者人口は、同国内の「南-東グループ」系諸部族のうち、最大規模のものである¹。

シエラレオネとリベリアの両共和国を中心とする、ギニア湾岸西部の森林地帯は、仮面活動に伴う秘密結社文化が存在する事で知られている。なかでも、領域中の諸社会に広く共有され、また各々の社会において部族体制のかなめともなっているのが、慣用上ポロ (Poro) と総称される男子秘密結社である。ポロへの入社は、森の割礼キャンプで執行される成人儀礼で果たされるので、原則として社会の全成人男子はポロ社員であり、同じく陰核切除の成人儀礼に基づく女子の秘密結社サンデ (Sande) と部族内で併存している。《ポロ・クラスター》という文化領域名で総称されてきた上記森林地帯の諸部族は、通常、政治首長のもとで各地に成立する小首長国家群の政治体制をとっている。だが、行政、司法、外交、などの多岐にわたる政治的権限は、結社長をはじめとするポロの高級結社員が掌握するところでもあるため、政治首長とポロ結社の間で権力の二分状況が生じている事実が、これまで多くの民族誌において報告されてきている²。

その点ダン族にも、同様の組織構造をもつ男子秘密結社ゴ (Go) が仮面活動と密接に連係して存在するものの、サンデに相当する女子秘密結社はみられない³。さらに重要なことに、ダン社会には「戦争の父 (glu dè)」と呼ばれる経済的な有力者以上の、確固とした政治首長が存在しない。象牙海岸側に限れば、今世紀初頭以来のフランス植民地体制下で、確かに「戦争の父」は「Canton」

の代表者として、フランス人との仲介をつとめる現地首長「Chef de Canton」の地位を与えられ、ダンの呼称としても「国/土地の父 (se dè)」に変遷した。だがダン族における理念上の国土所有者はあくまでゴであり、また「ゴは白人ごとときと直接に接触できない」という現地論理の故に、「戦争の父」はゴ結社の「後ろ (ziöö)」からの要請を受け、交渉の「前 (dhiö)」に立たされた代理人に過ぎなかった。加えて、《ポロ・クラスター》の体制と異なり、ダンの戦士はあくまで秘密結社防衛のための「ゴの戦士」にほかならず、つまり所「首長国」と呼ばれてきたその政治単位は、むしろ「結社国」に等しい内実を備えていたのである。

ダンは、父系原理の分節組織を基本とし、村 (pö) は、複数の地縁化した父系リニージ (gun go) から成る。そして近接数ヶ村のリニージ群を、現地では同一概念の父系クラン (gun go) が統合する。従って、数〜数十ヶ村の規模で成立するダンの「国 (se go)」は、単一あるいは複数の、これら父系クランから構成されている。

現地概念「Go」は、秘密結社全体とともに、結社の長も同時に意味する名辞である。一国を統率する大結社長の職は、特定のリニージ内での厳格な年令順で継承され、この特権的リニージ、また彼の特権的クランが、国や村の創設集団として観念されている。特に大結社長の住む村には、原則として歴代の大結社長が埋葬される聖なる森 (gun glöö dhe) や、結社の最重要の呪物が保管される「ゴの家 (Go ka)」などが存在するため、それは他の村落とは区別して「ゴの村 (Go pö)」と呼ばれる。だが、国内各村の代表リニージの最長老も、大結社長の代理/委託人という身分で、彼の村レヴェルでの小結社長「ゴ」を名乗る。さらに彼の村落内の各リニージの代表者は、いずれも「ゴの目」として小結社長の為に自集団の平常の監督義務を負うといった、同型反復的な組織構造となっている。

ゴ結社は、以上の如き内部構造を持ちつつ、結社裁判に於いて村落間の訴訟や国内の重要案件を裁決する司法機能を有し、市場の監督やナマズ漁の管理など経済活動の統制にも関与し、外交的次

元にあつては、軍事行動の理念的な発動者、また現実の調停者の機能をもかつては担っていた。

このような社会背景を持つダン社会のうち、本稿は象牙海岸共和国ダナネ(Danané)県での真島の現地調査に基づく資料から、以下での記述を進めていく。本稿が考察の素材とするのは、植民地体制下の公称でカントン・ヨロレ(Canton Yorolé)と呼ばれた、Loodhō 国の事例である。Loo-

表 1. Loodhō 国の村落構成

Canton Yorolé (現地名: Loodhō)			
公称	現地名	クラン名	
Gouakatouo	Guaatuō	Bhei	大結社長の村
Gogleu	Glooglōō		建国伝承の跡地
Yeleu	Yeidhō		戦争の父 在住
Bepieu	Bheeploō		
Guotouo	Guōtuō	Zluen	Zluen クランの中心村
Soampleu	Suanploō		聖山 Nion の管理
Gohoutouo	Goutuō		
Boutouo	Butuō		
Gouyampleu	Gbienploō

図 1. 象牙海岸側のダン居住域と植民地時代の“Canton”区分

図 2. Loodhō 国の村落配置

dhö 国は、全 9 ケ村、人口約 6,000 人(1987 年現在)からなる、ダンとしてはやや小規模の政治単位である。そのうち、真島が調査基地とした「ゴの村」Gouakatouo 村は、他の 3 ケ村とともに国の創設＝特権クラン Bhei に属し、残りの 5 ケ村が第二のクラン Zluen を構成している(表 1、図 2)⁴。

上記事例をもとに、まず以下の第一節では、ダン族の人々が、方位観念に内在する空間イメージを用いてゴ結社の起源をどのように語り、理解しているかが検討される。続く第二節では、人々が結社の社会体制を説明する際の語りを検討することで、本稿の記述も、結社そのものをめぐる空間イメージへと移行していく。最終の第三節では、前二節の補助的な空間イメージを基礎として、秘密結社あるいは秘密それ自体をめぐる最も本質的な現地イメージへの言及がなされるだろう。本稿はこれらの記述を通じ、秘密結社の語りにみられる、ダン族固有の論理空間を抽出しようとするものである。

1. 結社起源：流れる方位

表 2. 場所と方位に関する概念群

語義	共示的意味	原語
「場所」	地位/身分	"dhe"
「空の場所」	空虚/空しさ/跡地	"kpaan dhe"
「跡(地)」		"pin"
「線」		"bhüö"
「道」	方向	"zian"
「上の」	北の/東の	"dhuö"
「"dhuö" 方の世界」		"dhaa"
「下の」	南の/西の/地面の	"sia"
「"sia" 方の世界」		"goo"
「他界」	よその地/外国	"se gbɛ"
「登る」	北上する/東に行く	"da"
「降りる」	南下する/西に行く	"yoo"
「落ちる」		"puö"
「去り来る」	出身である	"go"
「流れ去る」	通過する/凌駕する	"ziö"
「来る」		"nu"
「行く」	立ち去る	"dho"
「起源」	出身地	"go dhe"

空間的でない事象の伝達を容易にするべく、言語が空間的な比喻表現によって「想像上の論理空間」を生み出す本質をもつ点は、哲学においてであれ、言語学においてであれ、自明の域に属する言明であろう。かつてはこの本質を西洋諸語の特異性とみなし、「異文化」に反例を求める論者もあった(Whorf 1941)が、ダン族の言語は、逆に論理空間を志向する傾きがある。一例として「場所」に関するダンの概念群は、社会人類学者の用いる論理空間と似通ったイメージを提出する。即ち、概念"dhe"は、日常の様々な「場所」を普通に意味するとともに、社会の各成員が占めるべき「位置/地位/社会的人格」の表現として、「結社長の場所(Go dhe)」「戦士の場所(kluë dhe)」「客人の場所(nian dhe)」「独身者の場所(kusa dhe)」の様に使われる。継承をめぐる文脈において、この概念は社会学的系譜空間に一層類似してくる。地位の継承ラインはまさに「結社長の場所の線を成す者(me e Go dhe bha bhüö do)」の如く、また継承行為は「私が彼から戦士の場所を取る(a dho kluë dhe sü a dha.)」や「彼が道から去ったら、私がそこに居る(Ya go zian, a ye mü.)」などの様に、線(bhüö)や道(zian)などの空間イメージで語られる。さらに、継承ライン上の空虚も、^{から}空の場所(kpaan dhe)や跡地(pin)などの空間語彙でそのまま「彼が私の父の跡地を見つけた(Ya ye n dë pin bha.)」や「大結社長の^{から}空の者(Go kpaan me) [=大結社長の家系となる機会を逃してしまった伝承をもつリネージ]」の様に語られてしまうのである(表 2)。

このように、空間化したイメージによって事態を解説する志向をもったダン族にあって、例えば「ゴ結社の制度は、どの方角からこの土地に伝わってきたのですか?」という調査者の質問は、方位空間そのもののイメージと、秘密結社の喚起する問題性とが微妙に折り重なった回答によって応じられることとなる。

ダンの方角観は四方位ではなく、「太陽の立ち上がる道/方向(lan luu zian)」「太陽の行く道/方向(lan dho zian)」の二方位からなり、現地では前者を「北」または「東」、後者を「南」また

は「西」と、個々の文脈に応じて仏語で訳し分ける。ただ日周運動に基づくこの方位名称は、ごく日常の文脈ではあまり使用されず、通常、前者は「上の道／方向 (dhuö zian)」, 後者は「下の道／方向 (sia zian)」と、上下の対立で弁別される。「dhuö」と「sia」の二語は、それぞれ「上の方」「下の方」という空間の高低を指示する為に普通に使われる概念なので、ダン語表現において、北(東)と南(西)の方位対立と上下の対立とは融合していることになる。例えば「北／東に行く」は「私は上に登る (A da dhuö zian.)」となり、「南／西に行く」は「私は下に降りる (A yoo sia zian.)」または「下に落ちる (püö sia zian)」とも表現されうる。さらに「dhuö 方面の地／世界」「sia 方面の地／世界」の含意を伴う概念としてそれぞれ「dhaa», 「goo」が存在する(表2)。

だが、ダンで方位の指標となるのは日周運動だけでなく、上記表現中の一単語でもある「道 (zian)」が第二の指標となる。ダンでは、自動車が最低限とおれるほどの未舗装道が村落間をつないでいるが、村人たちは、この公道を二方位の基準線とみなし、他のすべての村道や森の道の往来方向をも、最寄りの公道が体现する二方位に準拠するように判断する。その結果として、村ごと、厳密には道ごとに、その場だけの確定方位が存することになる。村の中で二本の公道が交差する場合など、その同じ村に二種の方位準拠線が成立することは言うまでもない。

さらに川 (yi) の流れは、ダンの方位観に於ける第三の指標である。例えば、南／西への移動が「川とともに降りる (yoo yi ka)」と表現される場合があるが、これはダンの地理環境に因る。象牙海岸側のダン族居住域を通過する Cavally 川、Nuon 川などの主要河川は、概ね北から南方のギニア湾へ流れる方向性をもっている(図1)。そこで、公道に準拠した状況依存的な「道の方位」と同様、個々の支流においても、大河川を基準に水の「流れ去る (ziö)」方向が「下」、つまり南／西と判断されることになるのである。

ところでダンの宇宙論は、この「流れ去る」方位に特別の関心を払う。まず人間の靈魂 (nii) は

死後、川の流れに南／西の方角に「流れ去る」と表象される為、墓地に最寄りの公道が示す方位を基準に、死体の頭は北／東に、足は南／西に向けて埋葬される。こうすると死者の靈魂は「己れの足で道／方向に沿って南／西に立ち去ることができる」からである。「我々の魂は、流れ去るものだ。それは南／西に降りるのだ (Kua nii bhè, ziö pè mü. E yoo goo glöö.)」という現地の語りにみられるように、川の流れ去るその先には死者の住まう「よその土地／他界 (se gbε)」が存在し、南方や西方の村を旅すると、死んだ知人にばったり会うことがあるともいわれる⁵。

現地の論理では、死をはじめとするすべての凶事は、みな南／西に「流し去るべき」ものとみなされる。喪明け儀礼での沐浴、ゴ結社の聖所に入る前の川渡りの儀礼などにおいて、人は「悪い／けがれた (ya)」もの一切を、川の流れとともに南／西に流し去る。妊婦の死に際し、故人の衣服はすべて川に投げ込まれ、南／西に流される。ゴの結社裁判に於いて、結社長の代弁者は「悪いことすべては流れ去って、南／西に行け (Wun yaa saadhö ya ziö, e dho goo glöö)」と祝別をたれるのである。では、なぜダンの方位観に於いて、「道が降り」「川が流れ去る」といった流動的イマージュがこれほど強調されるのであろう。この方位意識こそ、部族の起源伝承、また秘密結社ゴの起源伝承に密接に関与してくる因子なのである。

《ポロ・クラスター》諸部族の移住史を年代推定する Person の論考(1961)では、ダン族が西暦1300～1800年の500年間に、北方サヴァンナのマリンケ族の圧力で、徐々に現在の森林地帯へ南下していった過程が詳細にたどられている。のみならず、初期の民族誌以来、一般にダン族は、マリンケの圧迫による森林への「逃亡民」「避難民」という形容を施されてきている (Vendeix 1924: 149-151)。ダン族研究の第一人者 Himmelheber も、先学の主張に従いつつ「ダン族は、自分たちがそもそも北東由来 (aus dem Nordosten) であることを、我々に一致して語る」(Himmelheber und Himmelheber 1958: 11)と述べ、秘密結社ゴの起源についても、Fischer とともに「西部の

ダン人は皆、調停者たるゴ結社が、前世紀の或る時期に北東(northeast)から導入されたという点で一致している」(Fischer and Himmelheber 1984[1976]:105 また Fischer 1980:85-86)と確信している。だがダン族の北方起源と南方移住が疑えない歴史事実であるとしても、「起源」をめぐるダンの現地解説が常に示す「北東」という方向を、上記民族誌が歴史的に納得できるものとして自然に扱ってしまった点に、本稿は注意を向けねばならない。いかにも地理的・空間的な解説のようにみえる「北東」というこの概念の現地語は一体何だったのであろうか。ダン語の二方位表現を鑑みれば、それはまさしく「上の方」を共示する現地概念「北／東(dhuö)」ではなかったであろうか。

「南／西」が流れ去る方位であるのに対し、ダンに於ける「北／東」は常に何者かがそこから「去り来る(go)」方位である。先述のゴ結社の祝別では、悪いことはみな南／西に流れ去るべき句が叫ばれた直後、「やって来るなかでも良い事柄はこの地に座れ(Wun sè'e nuon, e ÿanu.)」の句が後続する。「物事の起源」を意味するダン語が「去って来た場所(go dñe)」と純然たる空間イメージで表現される様に、ダンでは部族自体もゴ結社もすべて「やって来たうちの良いもの」なのであり、「去って来た」その方位こそが「上／北／東(dhuö)」となるのである⁶。

Loodhō 国の起源伝承によると、ダン族はかつて「上の方」で同じ南—東マンデ系部族のグロ族と共住していたが、やがてグロと別れて「下に降りた」。Loodhōの大祖先は、Man 付近を通過し、Blouno 地方にしばらく住んだのち再び移動を始め、Oua 地方を通過して現在地に至り、国を建てたという(図1)。以上の移動経路は、まさにダンの方位観における「上から下への流れ」にはかならない。現地解説をそのまま再現するなら「彼ら[=大祖先]は上を去り来て、下に降りた(Wo go dhuö, wo yaa sia.)」または「彼らは川とともに降りてきた(Wo yaa yi ka.)」のである。そもそも国名“Loodhō”の“Loo”も、動詞「降りる(yaa)」がなまって生じた名称であると、彼らは語る。部族起源をめぐるこの論理枠

組は、もちろん Loodhō 一国のものではない。例えば、Loodhōの大祖先たちと別れてさらに「下に去った(dho)」者たちが、現在の Lollé(現地名 dhoo[>dho]) 地方の祖先だという伝承があるが、Lollé 地方の村人たち自身もやはり、「我々は上から降りてきた」という解説を反復する。

ところで、現地概念の「北／東」が「上」と同義であることから、この方位は自然、現世とは別の世界、それも「南／西／下」のそれとは性格の異なる他界性を帯びることとなる。即ち、起源をめぐる伝承に「上方から降りる」を「天から降りる」と解釈する異説が出てくるのである。「祖先は天を去り、降りてきたのだ(Wo go dhang gü, wo yaa.)」⁷。無論この異説は、“Loodhō”の“Loo”の由来も「天から降りる」の意として説明を一貫させてしまえる。まして現地の話題がゴ結社の北／上方起源へと移るや、その語りに登場する方角は、俄然、他界性を濃密にしてくる。彼らは一様に「ゴは北／東を去って来た(Go go dhaa.)」と語るのだが、これはゴの起源が北／東方にあることを意味すると同時に、「ゴは神のもとを立ち去って来た(Go go zlan piö.)」という異説と同じ表明をしていることにもなってしまうのである。ここで、「北／東／上」の方位がもつ他界性の本質をさらに明確にする必要が生じてくる。

今日に至るダン族の移動史はそのまま、彼らと北方サヴァンナ由来のマリンケ族(mèn)との摩擦の歴史であったばかりか、今世紀初頭以後は「白人(kui)」が彼らに及ぼした混乱の歴史でもあった。今日でもダンの長老層のなかには、かつてのマリンケ族に対する恐怖感を、フランス植民軍への恐怖と混同して語る者がいる。ところで、マリンケが「北／東／上(dhaa)」由来の部族と認識されるのはともかく、ダナネ地方南部のダンでは、「白人」も常に「北／東／上(dhaa)」から「降りて来る」者とみなされているのである。

フランス軍によるダナネ地方南部の「平定」作戦(1905~1913)は、現ダナネ市を基地として展開された為、方向として常に南進の戦略をとるものであった(Amon d' Aby 1951:29)。象牙海岸内務省保管の当時の記録による、“Canton Yorolé”の

「降伏」年月日は1906年7月25日、現地首長任命は1909年3月となっている(Laurent 1906, Banaillui 1918)が、当時の「降伏」経緯を語る Loo-dhō の古老によってとりわけ強調されるのは、「白人はやっぱり上の方から降りて来て、始めに Soampleu 村の道から我々の国に入って来た」という事実(図2)、また「白人は、雇われ通訳として、上方の Sipilou 地方のダンの男を連れていた」という事実(図1)なのである。さらにこの地方では、「南/西/下(goo)」から「登って来た」ような白人は、支配力をもつ様な真の白人ではない、という観念がある。彼らの宇宙論に合致しないこの事態は「[マリンケ由来の]粉タバコが下からやって来た」という嘲弄の定形句で語られる。また現代的な状況の把握についても、首都アビジョンであれ、南方のギニア湾岸の町であれ、あるいは「白人」調査者の出身国日本であれ、それらの「白人」的な町/都会はすべて、ダンからみて「北/東/上(dhuō)」の場所とみなされている。マリンケ族に限らず、ダンの土地に新体制を携えて「やってくる」者はすべて「北/東/上」由来の者であり、彼らはこの方向からしか外部の力を考えようとしなない。逆に、現実の地理空間からみたダン居住域の南方と西方の土地のうち、彼らが明確に認識する「南/西」はゲレ族の土地やリベリアのダン居住域までで切断、閉鎖され、その向こう側には、川とともに魂や災厄が流れ去っていく真の他界が広がるばかりなのである。

本稿は以上の記述をふまえ、改めて、秘密結社ゴの起源をめぐる現地論理の問題に立ち戻ろうとしている。部族自体が北方に起源をもつダン族において、現行の政治-社会体制を左右しうる他者は、いつも「北/東から川に沿い、道を通して流れて来る」というイメージが存在する。この方位は「上から降りて来る」イメージと重なる為、社会体制の発生源としての神話的な他界性を帯びてもある。彼らのイメージによれば、まず自らの大祖先が、上から流れ降りて来て現在の地に定着した。次に、神聖な秘密の制度ゴが、上から降りてきて、彼らの社会体制となって土地にとどまった。ゴの社会体制を混乱させるマリンケ族の

圧力は、ダンの土地に恒常的に北から流れ降りて来た。そして最後に、圧倒的な支配者「白人」が、上から流れ降りて来たのである⁸。これらの「降臨者」のうち、ダンが自らの体制として受容したのは、自部族の新たな移入者とゴ結社の制度だけであったとすることができる。

このような観点の下で興味深く思われるのは、それ自体が上から流れ降りてきたゴ結社の内部に、「北/上方」由来の他者と新体制を拒絶する如き言語表現と規範が存在する事実である。尤も、ダンがもはやマリンケの軍事的圧力を感じぬ今日、ゴ結社が拒絶する対象は、専ら「白人」と「白人の事物」となる。ゴの規範として、結社の聖所や結社裁判、あるいは大仮面が登場している現場では、白人自身の同席はおろか、村人たちも「北/上方の言葉(dhaa wo)」としての伝話を、一語たりとも罰金を払わずに口にすることなどできない。また西洋式の靴や衣服も「北/上方の布(dhaa so)」である以上、結社に関わる現場での着用は許されない。腕時計もゴ結社の言い方では「北/上方の手(dhaa ko)」となり、その他、洋眼鏡や洋傘など一切の事物が、結社そのものへの不敬となるのである。いわば、新体制とともに「北/上から流れ降りて来た」他者は、かつて同一の他界から流れ降りてきた現行の社会体制ゴを脅かしてはならない、という思考がそこに底流しているかの様である。部族移動の歴史が川や道の記憶と連係して成立したダンの方位観は、固定的な方角設定の発想とは縁遠い、「流れ」の運動性を有している。社会の外部が「上/北/東」の空間にしか開かれていない以上、新たな事象はすべて「流れ降りて来た」起源をもち、去り行くべきものだけ「下/南/西」に「流れ降りて」行く。ダン族(Dan wo pō me:ダンの言葉を話す者)とゴ結社は、流れ降りて来て現世にとどまった事物のうち、「北」の他界性を帯びた唯一の「良い事柄(wun sē)」である⁹。「白人が来る前は、仮面が白人だったのだ。仮面こそが、あらゆる物事を支配していたのだ」という語りが暗に示すように、ひとたびダンの土地に踏みとどまった結社制度は、上方由来の新たな外部者、異なる体制をみな拒絶し、上

から下への「流れ」を途中で分断する空間イメージの主体となった様に思われる。では、北方から流れ来て土地に根付いた秘密結社ゴは、次の段階でどのような空間イメージとともに、現地で語られていくのだろう。

2. 結社体制：とぐろに巻かれる核

表3. 定住と中心に関する概念群

語義	共示的意味	原語
「山頂」	頭頂	*tuö
「川」	水/液体/沼	*yi
「土地」	国/地方/土/大地/現世	*se
「創村する」	刺す/杭を打つ/基づく	*gban
「定住する」	座る/据える/置く	*ya
	座る	*yaanu
「拡散する」	ばらまく/散らばる/流行する	*pen
		*yon
「取り巻く」	巡る/とぐろを巻く	*ploo
「中心」		*ziën
	核/種子/骨/物の固形部分	*ga

ダン族の移住伝承では、祖先が、どの山頂(ton tuö)にしばらく住んだあと、どの川を渡って現在の地に至ったかという、山(ton)と川の地理説明が必ず為される。とくに南下移動中の集団にとって、山頂に住む行為は他部族の侵略から逃れる上で最善の策であった。「Zluenの祖先は、常に川沿いの狩人の道を進み、夜は川辺に寝ながら、いくさを避けて降りてきた。その後、祖先はVlean山を見付け、『ここに座れば、いくさは来ないし、いくさは我々を見付けはしまい』と考え、その頂きに村を建ててみた。但しこの種の語りも、単なる地理説明以上の、空間イメージに則った現地論理として理解される必要がある。即ち「山頂に住む」とは「下へ流れ降りる」移動の渦中であっても自集団の「上方起源」を確認する語りである。ダナネ地方に多数存在する「～の山頂(tuö)」式の村名は、実際の避難行為を移動伝承として逆手にとった「上方起源」の表明にはかならない¹⁰。また「川を渡る(yi kan: 川を切る)」とは流れに沿った下降運動を自ら断ち切り、定住に向かう行為を示唆している。

祖先が下方に流れ移った末、降り立ち定住した土地(se)が国(se go: 土地のまとまり)となる。Loodhöの建国伝承によれば、まずBhei クランの大祖先 Tia が身内とともに「Cavally 川を渡って」現在の Glogleu 村に到達して国を興した。その後、Zluen クランの祖先がゴ結社の呪物を持って「上/北(dhaa)」から流れ降りて来た。やがて隣接のゲレ族との戦争が激化するなかで、ゴの呪物は先着クラン Bhei に売却され、同国に現在の結社体制が確立したことになっている。ダン族の移住伝承は、国の創設クラン自身がゴの呪物を持って上から降りてきた、という構造をとるのが普通だが、この点で例外的な Loodhö 国の伝承にも、ゴ結社の社会体制が帯びる空間イメージが、語りの中に自然に投影している。「……Tia は Cavally 川を渡ったところで、今後ずっと座る場所(ya dhe)を探す為にも、ひとまずその場で仮住まいすることにした。野営の地には、まず戦士の呪物を保管する小屋が建てられ、見張りの人間が置かれたうえで、男たちは七日間というもの、土地という土地を歩き回った。ようやく彼らは今の Glogleu 村の辺りに良い場所を見つけ、移動し、座った。そのあと、Zluen の祖先たちが上を去り、Tia が杭を打ち込んだ(gban)土地に降りて来て、Tia を主人(deen)とたのみ、客人(nian)となった。Tia は『さあ、おまえたちは身内のかたまり毎に、自分たちの座る場所をこの辺りで探さない』と Zluen の者たちに申しわたした。土地に座る許しを受けたので、Zluen の祖先たちは今のような村々に散らばり(pen)、ゲレ族に向かいあうような場所に座った。Tia は『我ら Bhei は、同じ人間[一個のクラン]でゴ[大結社長の特権クラン]になろうとする者だから、真ん中(ziën)に座ろう。もしいくさがやって来たら、我らがすぐに気付けるような仕方で、おまえたちは座る場所を探すのだ』と命じていたからだ……」

以上は、同国に伝わる建国伝承群のうちの一異説に過ぎないが、ゴ結社を基盤とするダンの社会体制を語るための、基本的な空間イメージ群がここに表出している。伝承で解釈された村々の配置は、現実の空間にかなり即応しているものの(図

2), それが本稿の関心対象となるわけではない。秘密結社体制をとるダン社会にあって、概念“Go”が「中心 (zièn)」や「核 (ga)」などの言葉で語られ、その「周囲を取り巻いて (ploö)」新参の移入者が地縁化し「土地／国 (se)」が発生するという、現地の理論格子としての空間イメージこそが、今回の問題なのである(表3)。

上記伝承をみると、第一にゴが、「成員を吸引する中心」として「杭を打ち込んだ (gban) 土地のあるじ (deen)」という空間イメージ、また「地縁発生の中核」として「座る場所 (ya dhe) の真ん中 (zièn)」という空間イメージで語られている事がわかる。

交易部族マリンケの組織原理ともいうべき「あるじ (diatigi) - 客人 (lunan)」の紐帯慣習が (Lanunay 1978), 南下移住の歴史に屈した農耕民ダンでは、別の意味を以て共有されている。即ち「流れて来た者」が移動先の村に定着する場合、彼は最初に「客人 (nian)」の身分で村落生活に参入し、村人の誰かが「後見人 (nian deen: 客人のあるじ)」として、新成員に関する一切の責任を負わねばならない。もし「客人」が不祥事を起こしても、裁判の場で連帯責任を負うべき彼の出身リニージはその村に存在しない。そこで「後見人」が、代わりに弁明の務めを負うことになる。この擬制的な関係が、やがては「客人」とその子孫たちを村の「身内」とみなしていく素地となるのである。

地縁発生をめぐるこの文脈も、当然ゴ結社の社会体制下のものである。そもそも秘密結社の中枢を掌握し、大結社長の地位を保持するような特権クランは、無人の土地に「杭を打ち込み」国を創設した「土地のあるじ (se deen)」である。この「杭を打ち込む／刺す (gban)」という動詞は、創設者に「真ん中」の位置を保証する空間イメージである。また「あるじ」をめぐる秘密結社の語りによれば「ゴは人間を支配する者だから、国内のすべての村人はゴの子供で、すべての女はゴの妻のようなものだ。だから村人をなぐる者は、ゴの子供をなぐったと同じだから、村で争い事をしてはならない」。「客人」も村の新成員として「ゴの子供」ということになる。「客人」が住み

始めた村のゴ結社長は、彼の入村を許可した最終的な責任者として、彼の現実の「後見人」を超越した次元で「客人の大主人 (nian deen kpil)」と呼ばれるのである¹¹。Loodhö 国の移動伝承においても、将来、Bhei 自らが体現すべき「吸引する中心」の空間イメージが、Tia 移動中の挿話によって何気なく表出している。「移動中の Tia は、Oua 地方の D 村でそのゴの客人となったことがあった。Tia が『自分の座る場所を探しているところです』と言うと、結社長は『あなた方は私の客人として来たのだから』と言って、10のマニオクの畑と村の一区画を Tia の一団に与えた」。(ちなみに、ゴの村 Gouakatouo に「上から降りてきた白人」として「客人」願いをした真島は、内務省発行の調査許可証を持ちながら「長老〔大結社長〕の許し」がでるまで一週間以上を費やし、その後、同村々長が「後見人」として真島の「父親」となった。以後、「異国に出身リニージをもつ」真島に関する全ての細かなトラブルの責任は村長の双肩にかかるかたちで調査生活が続いた)。

また地縁発生の中核としてゴ結社に与えられた「座る場所の真ん中」という空間性は、その連続線上に、同型のイメージを生産していく。例えば、「客人」としての新参者、新参リニージは現地で「ゴのもとにきた者 (nu Go piö me)」と語られ、許可済みの新生活は「ゴの足元で杭を打ち込む (gban Go gendhö)」と解説されるのである。これらの語りにおいて、「国の中心」という、論理空間は、秘密結社組織の頂点たる大結社長の村「ゴの村」として現実空間に投影され、「Loodhö は Gouakatouo の場所に杭を打ちこんでいる (Loodhö gban Guaatüö dhe bha.)」の様に語られる。従って「ゴの村から人々が出ていってしまうなど考えられない。ゴの村とは、大結社長のもとに人々が移り住みにやってくる場所だからだ。ゴの村から人が出ていく時は、彼が結社に不敬をはたらいて追放される時だけだ」という語りが生ずる結果となる¹²。また「ゴは、理由もなく自分の村からよそに出掛けてはならない」という大結社長の禁忌、「ゴの村の村人は、大結社長への予告無しに勝手に自分の小屋を壊してはならない」という

一般人の禁忌などのすべては、「地縁発生の核」として「中心」が揺らいではならないという、空間イメージ優先の現地論理に起因している。そしてこの「中心」から見れば、国内のすべての村人は、移入時期の差こそあれ、いずれも建国伝承以来の今日までに「ゴのもとにやって来て、杭を打ち込み、ゴを取り巻いて (plooo) 住むようになった」新参者だと言うことができるのである。

上述の Loodhō 建国伝承には、第二に、社会の成員が「真ん中を取り巻いて」定住し、結社体制を支えているという空間イメージが表出している。Bhei クランの大祖先 Tia の命を受けて、Zluen クランの祖先たちは、現在の五ヶ村の前身となる場所にそれぞれ創村することになった。このような場合、定住行為は「座る (ya, yāanu)」のイメージで語られ、ダンの村名に典型的な「～の場所 (dhō)」「～の所 (piō)」「～の中 (glōō)」「～の村 (plōō)」などの接尾辞により、自らの「座る場所」を意識した村落命名が為される。そしてゴの村の大結社長を「取り巻く」各村の代表リニージが、「中心」の代理人たる小結社長職を享受し、その村で特権化していくのである。上記伝承にみられるように、「真ん中を取り巻く」べく、村落が国内各地に創設される状況は「散らばった／ばらまかれた (pen, yōn)」のイメージで語られることになる。

ここで問題となる「取り巻く (plooo)」という論理空間のより正確なイメージは、Loodhō 国ではほぼ一致して語られる以下のトーテム起源伝承に、明瞭に表出している。「我々の祖先たちが、或る時、Nion 山 [= 同国のゴ結社が所有する聖なる山 (図2)] に登ると、スルという名の木の周りにとぐろを巻いている (plooo) 一匹のクサリヘビを見つけた。そこで祖先たちは『我らのトーテムであるスルの木の周りにとぐろを巻くヘビなのだから、それは我らの周りにとぐろを巻くと同じ事だ。だからクサリヘビは食べないこととしよう』と言った。[…] ヘビがとぐろを巻くように、すべての者が団結していれば、我々の Loodhō はいつも良い状態でいられる」。

建国伝承以来の Zluen クランの大祖先に対して

も、移住の歴史がいまだ浅い新参リニージに対しても、現地ではこの同一の空間イメージを介して「彼はやって来て、ゴの周りにとぐろを巻いた (Ya nu, ya plooo Gō ka.)」と等しく語られる。「土地／国に座る」誰もが「とぐろ」の一端に加わり「とぐろ」であることを自覚することで、やがて、あたかも彼方の「中心」の存在は疑いのようなものと誰にも認識されていき、そのイメージによって、現行の秘密結社体制は確実に語られていくことになる。だがそれならば、これらのイメージに前提されている「中心」、即ち成員を吸収し地縁関係を発生させる主体、また成員によって取り囲まれた主体としての“Gō”とは、より厳密に言って何を指示する概念なのであろうか。これまで本節は、この「中心」を大結社長の住む「ゴの村」とみなしてきた。なるほど、国内の他の村々から眺めれば、確かに「ゴの村」は、大結社長ばかりかゴの呪物が保管される「ゴの家」や聖なる森が存在するなど、結社組織の中枢を体現している様に見える筈である。しかし本稿が既に留意した様に、「中心」とはあくまで現地の語りに出現する空間イメージの次元に属する形象であり、「真ん中」に見えるゴの村も、論理空間の実際空間への投影、実体化に過ぎない。事実、「中心」であるべき Gouakatouo 村の内部にすら、「取り巻くとぐろ」は確かに存在してしまう。同村には特権クラン Bhei に属する三個の父系リニージが存在するが、そのうち大結社長職を享受する特権的リニージ以外の二集団の祖先は「ゴの所にやってきて、ゴの周りを取り巻いた (wo nu, wo plooo Gō ka.)」者たちとして、先述来の仕方で同様に語られてしまうのである。

ではそれならば、当の特権的リニージ、または大結社長その人こそが「中心」であるとも、また先の建国伝承に於いて、土地に一時休止するなり真っ先に建築された「呪物保管の小屋」現体制で言う「ゴの家」、または聖なる森こそが「ゴの村の真ん中」であるとも、第三者は想像するかもしれない。しかしながら、空間イメージの謂う「中心」を現実の空間に求めようとする虚しさは、「秘密結社／大結社長」を意味する現地概念“Gō”の

真の奥義にあらわれている。即ち“Go”には「万物のうち、最も偉大なもの」「何人の目にも見えず、指さして示すようなことのできぬもの」という秘儀の意味が潜む為、実は大結社長ですらたかだか現世で「ゴの声を語る代理人」に過ぎぬほどの、ゴは不可視の他界的存在なのである¹³。同様に、ゴの村には「ゴの森」も「ゴの家」も呪物もあるが、それらすべては「指でさし示せぬ中心」としてのゴ自体ではもちろんない。

秘密結社体制をめぐる「真ん中 (ziën)」の空間イマージュは、触知できぬ「真ん中」というゴの秘儀的次元に至って、体制の真の基盤ともいえる「秘密」の「核／中心／種子 (ga)」の空間イマージュに変換する¹⁴。即ち、ゴの村のさらに「中心」ともいえる聖なる森やゴの家などの内部空間、またゴ結社の組織中枢に位置し、一般人の知らぬ秘密を握る大結社長とその周囲の高級結社員たちに関する一切の情報は、概念“Go”の本義が秘儀とみなされるのと同様、ゴ結社の「秘密の核 (zü ga)」として人々に語られる領域なのである¹⁵。前大結社長の第一夫人だった Gouakatouo 村の老婆は、右手の中指を「秘密の核」に、両脇の薬指と人差し指を「核をとりまく秘密」のイマージュとみたてながら、調査者真島に「おまえがゴの秘密／後ろ (zü) を見付けようとするのは、それがおまえの仕事というから仕方ない。仕事に励めば、[人差し指をさして]この秘密や[薬指をさして]この秘密は見付かるだろう。だがそこまでで、誰も秘密の核 (zü ga) までは決しておまえには話さなぞ」とイマージュを、手に投影して語る。

「とぐろ」に巻かれる主体が、結局は「秘密の核」にまで行き着くという事実は、結社社会の組織体制と秘密の存立構造とが、同一イマージュ下にある別次元の語りの対象に過ぎない事を示唆している。少なくとも調査者の視点からみれば限り、「とぐろを巻く」イマージュが自然と喚起する、「中心」の空虚な有り様は、大多数の人間によって輪郭を縁どられることではじめて成立するゴ結社の「秘密」のイマージュとしてこの上ないものとも思われる。だが、「秘密」というゴ結社の権威に関わる問題を検討するには、彼らのより根本的な

イマージュの言及に今や移らねばならない。

3. 結社権威：連鎖する前後

表 4. 前後に関する概念群

語義	共示的意味	原語
「前の」	以前の	*dhiö
「後ろの」	以後の	*zlöö
「代理人」	代弁者/随行者	*sië
「結界」		*dië
「内の」		*glöö
「外の」	出ている/見せている	*plaan
「秘密」	後ろ/尻/底	*zü
	後ろの場所	*zlöö dhe

本稿が冒頭に掲げた諺、「こどもが朝露を払ったあとで、おとなは己れの通り道を見いだすものだ」とは、ダンの社会規範における年長者と年少者の優劣関係を説いたものである。一日の畑仕事を始めに森の道を通る朝も、まず年少者が前を歩いて木々に付いた朝露を振り払い、尊重されるべき年長者がその後ろから悠然と進んで行く。後ろ (zlöö) に控える者が、前 (dhiö) にいる者より地位が高いという論理も、ダンで広く見られる空間イマージュの一つである。例えば、双子の出産において母体から先に出てきた子がオトウトで、後から出てきた子がアニとみなされる理由として、人はこの場合、脛道を「森の道」と捉えながら、上記の諺を解説に代える。またダンでは、双子に異常な「力 (dü)」が備わるとされながらも、母親がその次に出産した子供こそが双子を凌駕する「力」を持つものと考えられている。これも、後ろに控えていたその子の為に、双子がそろって「前で朝露を払った」というイマージュによって語られることとなる¹⁶。また、Loödhö 国の聖なる山 Nion の山頂に国内の高級結社員たちが一団となって詣でる際、「大結社長が朝露で濡れてしまわぬ様に」Soampleu 村の大仮面が山道を先導する習わしとなっているなど、ゴ結社の制度の中にも、この諺の忠実な再現行為は認められる。ただ問題

の所在は今回もまた、そんな実際の空間関係ではなく、秘密結社の権威がそれによって解説される、以下のような空間イメージの次元にこそ存する。

前節の Loodhō 建国伝承の中で、大祖先 Tia から定住許可を得た Zluen クランの祖先たちは、非常時勃発の報を「中心」に伝えられる様に、異国との境界にまで「散らばってとぐろを巻いた」はずであった。この求心的体制は、「前 (dhiö)」にいる戦士が「後ろ (zlöö)」にいるゴの大結社長と呪物を守る、と前後の空間イメージによって語られることもできる。つまり、ダンに於ける戦士はあくまでゴ結社防衛の戦士なので、彼らは秘密結社内部で、「ゴの前で戦う者 (Gə dhiö ko zè mē)」という地位名称をもつのである。

ゴ結社の呪物は「ゴの荷物 (Gə bha klueε)」と呼ばれる。ゴの荷物は、歴代の大結社長職継承者以外、何人も見ることの許されない部族最高の秘物として「ゴの家」に保管されている。逆に言えば、この荷物の「あるじ／所有者 (deen)」となる者が、一国の統率者たる権威を享受できるとされている。この理由から、ゴの荷物と大結社長は、守られねばならぬ「後ろ (zlöö)」の空間性で語られる。

Loodhō 国の場合、最初にゴの荷物を「上／北／東」から運んできたのは Zluen クランの祖先で、その荷物を Bhei クランが購入したことによって、同クランは国の特権的クランとなった。これら一連の呪物購入伝承は、まさに結社権威の前後イメージが駆使される語りの典型となる。「最初は Zluen の者たちがゴの荷物を持っていたのだが、ゲレ族とのいくさが激しくなってくると、『ゴの荷物は人間の手をしばりつけてしまう物だから〔荷物の移動には様々な禁忌があるから〕、我々も自由に動けない。また、いつゲレが荷物を奪い取ってしまうかわからない』と言い合った。そこで、後ろ (zlöö) に住まう Bhei の者たちに荷物を売ることを決心した。Bhei の者たちは、11頭の牛によって、とうとうゴの荷物を手にしたのだ。当時、いまだ Gogleu 村の辺りにかたまって暮らしていた Bhei の者たちは、買った荷物を守るために、今のような四つの村に分かれることにした。Be-

pleu 村の祖先は、いくさが荷物のある場所にまでやって来ない様に、一番前 (dhiö) の方に座って村を建てた。Yeleu 村の祖先たちは敵が Cavally 川を渡って攻め入らぬように、やはり前 (dhiö) に座って村を建てた。反対に、ゴの荷物を保管する家の者たちは、Gogleu 村より後ろ (zlöö) に座って荷物を守ることとなった。この者たちが大結社長の祖先で Gouakatouo 村の祖先なのだ。だから Bhei の他の三つの村は、みな Gouakatouo のゴの前を歩く者 (dhiö ta mē) という事では同じだ」(図2)。

ダナネ地方南部のダンにとり、隣接部族ゲレは、南下移動の過程で争わねばならなかった第一の交戦対象だった。定住後も捕虜や土地の獲得をめざして為された二者間の戦争におけるもう一つの目的とは、互いの呪物強奪にほかならなかった。現在 Loodhō 国が保有する仮面のうち、ゲレから奪い取った起源をもつものは複数ある。また、ゲレの戦士が国内で「最も後ろの」Gouakatouo 村にまで侵入するという最悪の場合を想定した、ゴの荷物の隠匿方法も同村ではいまだ記憶されている。さらに、ゲレに対する「最前線」でありながら聖山 Nion を管理する務めを負う Soampleu 村(図2)には「Nion の前にいる者 (mē e ye Nion dhe dhiö)」と呼ばれる軍事リニージが存在する。そればかりか、ゴの村たる Gouakatouo 村内にすら、ゴの荷物と大結社長をすぐ「前」で護衛する最奥の軍事リニージが配備されているのである。

つまり国全体としてみれば、「最前線」の Zluen クラン五ヶ村の「後ろ」に Bhei クランの三ヶ村が位置し、その「後ろ」にゴの村 Gouakatouo が控え、同村の戦士が「直前」で守るその「後ろ」にはゴの荷物と大結社長が控えている、という前後の空間イメージが次々と連鎖しているのである。あくまでもイメージに基づくこの防衛論理を、現地では「これが我々の昔の技術 (sié) だったのだ。白人はこれをポリティークと言うのだろう」と語り、ウフエ・ボアニー大統領の「前」にはマン県知事がいて、その「前」にはダナネ県知事がいて、その「前」にいる郡知事のさらに「前」には護衛の憲兵隊員がいるが、「最も後ろ」であ

る大統領の家にも、彼をすぐ「前」で守る身辺護衛の兵士がいる、などの今日的事例を得々と説いたりもするのである。

ダン族にとっての最後の交戦「部族」は「白人」たるフランス軍であった。従って、ゴ結社の当時の対応ぶりをめぐる現地の語りにも、前後の空間イメージは表出してくる。「白人は上方のOuaの者を案内人としながら Soampleu, Bepieu, Yeleu と順に我らの国の後ろへ後ろへと進んで来た。Gouakatouo 村に着くと、白人は、国の父 [= Chef du Canton] になる者は誰かと尋ねた。大結社長は『私はゴだ。だから白人ごときの国の父になどなれぬ』と言って、Gouakatouo の戦士長に職に就くよう命ずると、戦士長は『私もまた、あなたのすぐ前で戦う者 (u dhiö ko zë me) だから』と拒否した。そこで大結社長は、もっと前でゴを守っている Yeleu 村の者を指名したのだ。今日の象牙海岸共和国政府も、ダンの世界観では「白人」とみなされる為、地方行政の末端である村長職も、Gouakatouo ではゴの「前」にいる新参リニージの務めと代々みなされている。権力のこの様な今日の逆説も、みな同一の前後イメージに起因するものである。

以上の記述から、第一節の方位イメージと今回の前後イメージとの関連性が明らかとなってくる。方位イメージのもとでのゴ結社は、自らが「上／北」由来の体制でありながら、上から来た、己れ以外の体制を拒絶する傾向をもっていた。そして今回、ゴの「前」に配置された戦士が向き合い対抗する者こそ、「上方から降りてきた」外部者に相当している。「とぐろ」の求心イメージからは同心円的な図像が想起されるが、前後の論理空間においては、ダンの戦士はゴの前を守るばかりで、ゴの後ろから来る敵をイメージのうえで想定していない。この意味で、前後の連鎖イメージは、流れ来る方位に真っ向から向き合う直線的な構図をとっている。「上から降りて来た白人」への対応も Loödhö 国では前後の論理によって処遇されたが、白人のくせに「下／南」から来たような者は、第一節で紹介した如く「[マリンケ由来の] 粉タバコが下からやって来た」、現

地そのままの表現では「前の粉タバコが下からやって来た (zang dhiö go goo glöö)」と呼ばれる。マリンケも白人も粉タバコもすべて「上／北」のものだから我々の「前」にある筈なのに、それが「下」から来たという点に、この嘲笑の本義が存するのである¹⁷。

次に、前節の求心イメージと前後イメージとの関連については、戦士とゴ結社の上記関係から既に明らかであろう。秘密結社体制のイメージにおいて、戦士は「とぐろ」として「前」に立ち、ゴは「中心」として「後ろ」に控えると換言できる。だが、本稿が前節の最終部分でふれた「秘密の核」というイメージの問題性が、前後イメージにおける「後ろ」の問題となっていて、いまや再び送り返されてこうとしている。「中心」の真の内実は、秘密結社における秘密そのものの問題に関わるだけに、それは結社体制のイメージとしてよりむしろ、「ゴはいつも後ろにいて、決して前に出てこない」といった結社権威のイメージによってこそ検討されるべき問題である。

ゴ結社において「前 (dhiö)」の空間性を与えられるのは、防衛担当の戦士に限らない。結社内の役職の文脈において、前後イメージの連鎖は「代理人／代弁者 (sië)」の連鎖への変換を遂げる。制度上、ゴの大結社長には複数の「ゴの代弁者 (Go bha sië)」がいて、長に代わって結社裁判の司会進行役を務めたり、長の使者として村々に重要事項を伝達する任を負う。また、国内のすべての仮面は、直接または間接に秘密結社が統制する「森の精霊 (glöö)」とみなされているが¹⁸、現実の仮面着用者と、仮面に随行して村人との仲介役を務める者は、両者一様に「精霊の代理人 (glöö sië)」として結社内の地位が与えられている。そして大結社長や仮面のような「後ろに居る」べき大者の「前」で代理人となる、これら一連の役職名 “sië” は、「前に居る者 (ye dhiö me)」という空間的な総称によっても語りに登場するのである。また特に、ゴ結社全体の意志を代行して、規範侵犯の成員に制裁を下すような結社直属の大仮面は「ゴの精霊 (Go glöö)」と一般に呼ばれるが、大結社長との身分上の関係を明示したい文脈におい

て、それは「ゴの前にいる精霊 (Gō dhiö glöö)」と呼ばれもする。以上を前後イメージの構図として整理すると、仮面随行者の「後ろ」には精霊と化した仮面着用者がいて、着用者の「後ろ」には仮面の精霊そのものがある。だがその精霊はゴの「前」の精霊であり、精霊や「ゴの代弁者」たちをすべて合わせたその「後ろ」には大結社長が鎮座している。だが既に述べた様に、秘儀的知識の次元では、実は大結社長ですら不可視の超越存在 “Gō” の現世での代弁者として、その何者かの「前」に立たされる程度の役職なのであった。この “Gō” が居るべき場、それこそダンの語りでは「秘密／後ろの核」と表現される論理空間なのである。

第二に、前後イメージはゴ結社の聖所をめぐる文脈において、結界が分断する「内 (glöö) と外 (plaan)」のイメージへの変換を遂げる。国内で最も「後ろ」にある「ゴの村」の内部には、聖なる森、呪物保管所たる「ゴの家」などのものと「後ろの場所」が控えている。一般人がみだりに入ることはできぬ、これらの場所の入り口には、ラフィアヤシの葉で作られた、のれん状の結界 (dië) が聖別指標として必ず掛けられている。その奥の内部空間と外界の関係が、空間イメージとして語りに利用されるのである。

例えば大結社長の継承行為を語る際、現地では「彼はゴの小屋に行った (Ya dho Gō kōüdhö.)」または「彼は聖なる森の中に行った (Ya dho gun glöö.)」と表現される。継承後の語りでは「彼は聖なる森の中に居る (E Gō gun glöö.)」となる。同様の表現は仮面に関しても存在する。大仮面の着用者が登場前の準備をする小屋は、仮面の腰蓑のラフィアヤシが結界代わりに戸口に掛けられる。無論、その小屋の中に入れる者は、一部の特権的な成員に限られている。そしてこの場合、仮面が小屋から出て今まさに村に現前している状態は「それは精霊のところを立ち去って、いま外にいる (E go glöö piö, e ye na plaan.)」と語られ、仮面が務めを終えて準備小屋に戻ると「それは精霊のところへ行った (Ya dho glöö piö.)」となるのである。仮面の小屋をめぐる内外の表現は、実

際の空間にはほぼ対応してしまうので識別しにくい、大結社長の継承をめぐる語りにおける「内」と「外」は純粋な空間イメージだといえよう。彼は、決められた者だけが入ることを許される特権的な「内 (glöö)」に行ってしまった。ゴの荷物を見ることのできる彼こそ、いまや「秘密の内」ににいるという意味である。聖なる森や「ゴの家」は、人間の生死を越えた一種の他界なので、彼は特権者になったと同時に、二度と通常の生活に戻れぬ者ともなった。この事態は現地で「大結社長になってゴの家に入ってしまったば、彼がそこを立ち去って戻って来れる場所などもうない (Ya Gō kan, ya dho Gō kōüdhö, kō a go mü dhe yaa dhö gbä.)」と語られる。最後に、聖なる森によっては、入り口から森の中の最も奥の空間に至るまでに、三度も結界を越えていかねばならない場合がある。即ち、最初の結界の「内」には別の結界があり、その結界を越えたさらに「内」にまた結界が存在する¹⁹。第三の結界を越えた「内奥」の空間こそ、歴代の結社長継承者の埋葬場所であるが、現世としては最大限に他界的なその空間ですら、超越者 “Gō” の見え姿がそこに在る様な、真の「内」とはいえないのである。ゴの家、聖なる森、大仮面の着用小屋、のいずれであれ、秘密結社にまつわる結界とは、権威を持つ者と持たぬ者、秘密を知る者と知らぬ者の双方を「内」と「外」で重層的にわかつ様な、空間イメージを成立させる媒体となる。そして、このイメージにおける「内 (glöö)」こそが、言うまでもなく「秘密の核／後ろの核 (zü ga)」として語りで表現される空間なのである。

《ポロ・クラスター》の代表部族といえるメンデ族に於いて、ポロ結社の現地概念 “Poe” は「果てしない」「はるか後ろ」と逐語訳できるという (Little 1951 : 241 n. 1)。“Poe” が「後ろ」とか「果てない」の意味で日常も使用される単語なのか、本当は調査者の質問に現地の人々が秘密結社の空間イメージを語ってみせただけなのではないか、という本稿の勝手な疑義は別にしても²⁰、ダン族の概念 “Gō” にその様な語義はない。既に述べた様に、概念 “Gō” の本義は「男性秘密結社

／結社長」に加えて、「人間が見ることのできないなものか」なのであった。それに対し、上述の現地概念「zü」は「秘密」を意味しつつ「後ろ」を共示する名辞であり、本節が終始注目してきた概念「後ろ (zlöö)」もまた、ダン語では「秘密」を共示する名辞である(表4)。これら二概念こそ、ゴ結社の権威イメージ、ダンに於ける「秘密」の空間イメージを成立させ、つまりは論理空間のなかでの究極者“Go”の存在を保証する、根本概念にはかならないのである。

4. 結

ダン族の人々が、自社会の制度である秘密結社について語るとき、どのような空間イメージで論を組み立てていくか、という問題を本稿は扱ってきた。節ごとに言及された三様のイメージをいま振り返ると、いずれの空間像にも動的な性格が内包されていたことに気付く。結社起源が解説される際の語りでは、ゴ結社が動的な方位観の枠組内部で「流れ来たもの」の一つとみなされていた。結社体制の語りで提示されたイメージは、絶え間なく新成員を吸収する空間像として、さらに「中心」へ向かう幾重にも重なった「とぐろ」の布置として、その内部に運動性を備えたものであった。結社権威が述べられる際の前後連鎖のイメージは、まさに無限遡行としての、前／後／前／後の連なりの運動が空間像を貫徹していたのである。特に第三のイメージは、初めの二つを自らとの関連のうちに包含し、さらに、秘密結社の秘密それ自体の空間イメージともなる点で、ゴ結社をめぐるダン族の現地論理において、本質的な枠組を提供するものと言うことができる。

これまでの民族学において、方位観念研究はもちろん、いわゆる「求心的な空間構造」の事例は王権研究で少なからず論じられてきており、また「秘密の多層的性格」についても秘密結社の研究者が時として言及してきた論点である。ただ、今回の本稿が特に留意したかったのは、現地の語り、より正確には現地論理の発生源たる言語表現に考察の基礎を置き、「求心的」「多層的」などという

研究者側の論理空間からすり抜けていってしまうダン族固有の空間イメージを追及することであった²¹。結社体制下の求心的な地縁原理が「秘密の核」の話題へと、また社会の防衛原理が「後ろの秘密」の話題へと、いつのまにか地続きで語られてしまうダンの空間イメージは、研究者が「秘密」に関して自然に抱きがちなイメージと一体どの程度まで合致しているであろうか。

特に「とぐろに巻かれた核」「連鎖する前後」の双方の論理空間が、布置として備えている運動性は、権威／権力の源泉が「秘密」に存する社会において、秘密がいかに動的な社会空間として表象されている必要があるかという事実をあかしている様に思われる。従来の民族学的な秘密結社研究は、「秘密とは、本来、異なるカテゴリーや集団の成員たちを分離するような境界機構 (boundary mechanism) である」(Murphy 1980 : 193)といった静的・固定的な構図を前提とし、その多層的性格は研究者が改めて「翻訳」する傾向があった。だが例えば、ダン独自の空間イメージにあらわれた運動性をみるかぎり、そこにあらわれているのは、無数の「とぐろ」の「核」として、また無数の「前」の「後ろ」として、つまりは「秘密」が動的磁場として体现する、ダン社会の全成員との「距離」だったといえる。そしてこの動的布置としての「距離」が、結社社会の地縁化原理や防衛原理の語りにそのまま使用されることで、語られる題目も秘密の権威から結社の権力へと自然に移行していたのである。秘密とは、誰かが或る事柄を話そうとしない、という点で、本質的に言語に関わる行為である。まして秘密結社が社会を統制しているような場合、秘密に近い特権者、秘密に遠い多数者、の双方に共有されている空間的な語りこそ、社会体制の根幹を成す秘密の権威と結社の権力とを醸成する傾向を帯びる筈である。「秘密」が、究極の超越者“Go”として実体化されつつも、同時に、それに近い者、遠い者のどちらにも「距離の運動」として関係論的に語られている点に、ダンの空間イメージ群がもつ独自性がある様に思われる。

付記

本稿は、講談社野間アジア・アフリカ奨学金の援助、並びに国立象牙海岸大学、民族—社会学研究所による研究員の資格付与のうえで為された調査の一成果である。調査期間中、首都アビジャンから変わらぬ御支援を下されたアジア経済研究所の原口武彦先生、「ゴの村」での「白人」の調査生活が円滑となるよう御支援頂いたダナネ市在住の民族学者 Mamadou KAMARA 氏、また実際の調査基地となった Gouakatouo 村民の方々を始め、本稿は調査に御尽力頂いた関係者すべてに、この場を借りて深謝致します。

注記

1. 本稿のダン語発音表記は、Société Internationale de Linguistique 1981に基づくが、音調表記については省略する。尚、音声記号のフランス語近似音は、è = (le), é = (été), è = (père), u = (coup), ü = (日本語のウに近い張唇音), ö = (peu: 但し張唇で) o = (beau), o = (bol) の通りである。また、bh と gh は、それぞれ b, g の気流内行音、gb と kp は両唇・軟口蓋閉鎖の二重調音子音、ÿ は y の半鼻母音に相当する。
2. なかでもシエラレオネ・メンデ族に関する Little 1951の報告は、《ボロ・クラスター》の代表的な民族誌の一つである。
3. 性対立が強調されるダン社会にあって、結社化されない次元で存在する「女の秘密」に関しては、真島 1991b に於いて複数の問題が提示された。
4. 調査は、1988年7月～1990年5月の約22ヶ月間、Loodhō 国の在るダナネ県 Zouan - Hounien郡を中心に、Danané 郡、Bin - Houyé 郡までを範囲に為された。フランス植民地体制下の行政区分において、Loodhō 国は、図1のように「Canton Kouliné」に帰属する場合と、「Canton Yorolé」として単独に扱われる場合とがあるが、本稿は後者の区分法を採用し、前者のレヴェルでの行政単位を以下では「地方」と表現していく。また、ダン居住域の各地方毎に存在する言語・文化的変差を考慮し、以下の本稿は、明記せぬ限り他地方の二次資料を用いない。上記地方のゴ結社をめぐる社会背景については、真島 1991a に於いても、言及が為されている。
5. 但し Tabmen によれば、リベリア側のダン族の埋葬は死体の頭を西に向けて為され、また死者の住まう他界の方位も現地では確定していないという (Tabmen 1974: 161, 167)。
6. 《ボロ・クラスター》に属しつつ、ダン族とは全く異なる移動史をもつシエラレオネ・テムネ族に於いても、東 (Rotaron) は「万物がやってくる上方」で、

逆に西 (ro - pil) は「下へ」を共示する概念であり、テムネの祖先は「Rotaron から来た」とされているという (Littlejohn 1967[1960]: 334-336)。

ちなみに、インドネシア・セラム島の空間認識に関する古典的考察においても、現地の主要二方位が川の流れに沿って定位され、川下の海が死者の他界と連合し、川上の陸が人間起源伝承の舞台となっているという。西アフリカの一族ダンを扱う本稿にも興味深いのは、川上に人間発祥の山が、川下に死者の山があるという表象、また二方位の対立が試合組の区分法ともなっているという同島の事例が、いずれもダンに類似している事実である (イェンゼン 1972)。ただ靈魂観の話題というべき前者の考察、ダンの村相撲に属する後者の考察は、それぞれ機会を新たに論じなければならない。

7. 象牙海岸マン地方のダン族起源伝承においても、祖先は北から来たという伝承とともに、やはり天から降りてきたとする異説がみられる (Gba 1982: 35-36)。
8. 概念「kui」は、クルー語族系の隣接部族ゲレにおいても「白人」を意味する名詞「kwi」として共有されているが、それは「自然界と人間界を媒介する精霊」を共示するという (Schwartz 1971)。その点ダン族においても、同概念は特殊な呪薬を指す名称に使われたり、白人に限らぬ「支配存在」の意で使われたりもする。Zemp によれば、この概念は、「卜占の精霊」も意味する (Zemp 1971: 152)。
9. ゴ結社文化の伝播推定は未だ学問上の結論をみていないが、ダン族における秘密結社文化と仮面文化は「文化層」を異にし、後者が前者の古層にあたるとする論者がいる (Fischer 1980)。
10. 山間に住まい、ダンと多くの文化要素を共有する隣接部族トゥラを論ずる Holas は山の防衛上の意義などに言及しつつ、両部族における山住まいの志向性を「山岳文明」と形容している (Holas 1962: 19-26)。
11. 《ボロ・クラスター》に属するリベリア・ベレ族でも、首長制とボロ体制の両面で権力を掌握する特権リニージが「最初に土地に着いた」点に自らの権威根拠をおき逆に地位の低いリニージは「後になって土地に住みついた」集団とみなされている (Murphy 1980: 201)。尚、序でもふれた様に、「土地のあるじ (se deen)」という呼称は、植民地体制下で「戦争の父」の地位表現に変容するに至ったが、ダンの理念的な土地所有者は、常にゴ結社である。ダンの論理では「白人」に相当するウフェ・ボアニー大統領が、現地のダン語ラジオ放送で「我々の土地のあるじ (kua se deen)」と翻訳されるのも、「対白人用の」新表現に過ぎない。
12. リベリアのダン族では、規範を犯した罪人は、他国のゴ結社の「聖なる森」をアジュールとするという (Tabmen 1971: 1) が、他国のゴに追放されて移入してきた伝承をもつ集団は、Loodhō 国内にも見受けられる。
13. 概念「Go」の本義をヒョウとし、ゴ結社を西アフリカ一般に見られる豹人結社の平和的な亜種とみなすのが従来のダン研究者の見解であった。同概念が

ヒョウと誤訳されるに至った経緯については、機会を改めて論述したい。

14. ダン語研究者は概念“ga”の意味場として「骨／固い部分／核／産物」などを挙げるが (Doneux 1968 : 30, Doneux et Mahan 1969 : 26), この概念は、他にもまして、まずその空間イメージを鮮明にすることで解説に代えられるべき性格を有している。
15. Zemp は、ダンの概念“zü”が単独で使用される文脈を極度に限定し、「秘密」という語義も省略しているが、これはダナネ地方における事実と反している (Zemp 1971 : 83n.1)。
16. 双子観念をめぐるこの前後イメージは、実際の年令関係との間で独特の矛盾をきたしている。これは、時間における「以前」「以後」が、ダン語でそれぞれ“dhiö”“zläö”である矛盾と連関した、時空間観念間の矛盾といえる。また例えば、女子成人儀礼に於ける少女たちの行列で「前にいる (ye dhiö)」という呼称で呼ばれる先頭の少女は、通常、最年長者であり、彼女は儀礼において特権的な役割をもつ。《ポロ・クラスター》のリベリア・ヴァイ族の Sande 結社入社儀礼でも、行列の先頭に立つ少女は特権的な家系の者になるという (Holsoe 1980)。
17. 尚、ゲレ族の土地はダンの方位観に於いても、一般に「南／西／下」にあるものとされているが、Loodhō 国の場合、隣接するゲレ族居住域が、Soamplou 村の道の先にあることから、彼らのいる方位が個々の文脈に依存して語られる結果を生じている (図1, また図2)。
18. ダン族の仮面表象については、真島1991a がゴ結社との関係性の中からそれを論じている。
19. 聖なる森に関する知識は、ゴ結社の機密に属する為、今回は言及を避ける。また、これと同種の空間構造としては、男子階梯制結社の存在するメラネシア・ニューヘブリデス諸島に於ける、村はずれの聖所に至るまでの村落空間上の段階性、並びに「奥」たる聖所の「内部」自体に、階梯にむすびついたさらなる「内部」が在る例などに、ダンのイメージとの類似点がみられる (Deacon 1970[1934] : 23-25)。
20. リベリア・マノ族における Poro の意味場を、現地概念を挙げないまま「大地／土地」などと紹介する例 (Harley 1941 : 7) においても、それが語の実際の意味場なのか、語が喚起する空間イメージなのかは判然としていない。
21. タンザニア・イラク族の「領域」概念“aya”を「イメージ」として分析するに際し、現地の語りを丹念に追うなかで「クモ[の巣]のイメージ」を抽出した後、それを改めて「関係性と連続性」の表現と論ずる Thornton の態度には、概念“ploö”の「ヘビのとぐろ」のイメージなどを介することで「求心性」を提示する本稿以上に、現地論理への徹底した尊重がみられる (Thornton 1980 : 61-65)。

参考文献

- Amon d'Aby, François-Joseph, 1951, *La Côte d'Ivoire dans la cité africaine*, Paris, Éditions Larose.
- Banaillui, (Le Capitaine), 1918, “Fiches signalétiques des chefs indigènes Cercle du Ht. et Moyen Cavally”, document manuscrit 2EE8(9), Abidjan, Archives nationales.
- Barth, Fredrik, 1975, *Ritual and Knowledge among the Baktaman of New Guinea*, New Heaven, Yale University Press.
- Deacon, Bernard A., 1970[1934], *Malekula: A vanishing people in the New Hebrides*, Oosterhout N. B., Anthropological Publications.
- Doneux, Jean-Louis, 1968, *Esquisse grammaticale du Dan*, Dakar, Département de Linguistique Générale et Linguistique Africaine de la Faculté des Lettres et Sciences Humaines de l'Université de Dakar.
- Doneux, J.-L. et J. Mahan, 1969, *Exercices de langue Dan (Côte d'Ivoire)*, Lyon, Afrique et Langage.
- Fischer, Eberhard, 1980, “Masks in a Non-Poro area: the Dan”, *Ethnologische Zeitschrift Zürich*, 1.
- Fischer, E. and H. Himmelheber, 1984[1976], *The Arts of the Dan in West Africa*, Zürich, Museum Rietberg Zürich.
- Gba, Daouda, 1982, *Les masques chez les Dan*, Mémoire de Maîtrise de l'Université Nationale de Côte d'Ivoire.
- Griaule, M. et G. Dieterlen, 1951, *Signes graphiques soudanais* (L'Homme 3), Paris, Hermann.
- Harley, George Way, 1941, *Notes on the Poro in Liberia*, Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, 19-2, Cambridge, Mass., Peabody Museum.
- Himmelheber, H. und U. Himmelheber, 1958, *Die Dan: Ein Bauernvolk im westafrikanischen Urwald*, Stuttgart, Kohlhammer.
- Holas, Bohumil, 1962, *Les Toura: Esquisse d'une civilisation montagnarde de Côte d'Ivoire*, Paris, Presses Universitaires de France.
- Holsoe, Svend E., 1980, “Notes on the Vai Sande Society in Liberia”, *Ethnologische Zeitschrift Zürich*, 1.
- イェンゼン・アドルフ・E, 1972, 「試合組, 双分組織と方位観」(岡千曲 訳), 『神話・社会・世界観』(大林太良編) 所収, 東京, 角川書店. (Jensen, Adolf E., 1947, “Wettkampf-Parteien, Zweiklassen-Systeme und geographische Orientierung”, *Studium Generale*, 1.)
- Launay, Robert, 1978, “Landlords, Hosts, and Strangers Among the Dyula”, *Ethnology*, 18-1.
- Laurent, (Le Capitaine), 1906, “Rapport de reconnaissance effectuée dans le poste de Danané: 1906”, miméographie, Abidjan, Archives nationales.
- Little, Kenneth L., 1951, *The Mende of Sierra Leone*, London, Routledge and Kegan Paul.
- Littlejohn, James, 1967[1960], “The Temne house”, in J. Middleton, ed., *Myth and Cosmos: Readings in Mythology and Symbolism*, New York, Natural History Press.

- 真島一郎, 1991a, 「面(おもて)の不在を生きる仮面―ダン族仮面文化に於ける『力』の正当化と排除」『民族学研究』55-4.
- , 1991b, 「身体をあつかう身体 ―ダン族にみる異性とのへだたり」東京大学文化人類学研究会に於ける研究発表, 2月1日, 東京大学教養学部文化人類学研究室.
- Murphy, William P., 1980, "Secret knowledge as property and power in Kpelle society: Elder versus youth", *Africa*, 50-2.
- Person, Yves, 1961, "Les Kissi et leurs statuettes de pierre dans le cadre de l'histoire Ouest africaine", *Bulletin de l'IFAN*, série B, 23.
- Schwartz, Alfred, 1971, *Tradition et changements dans la société Guéré*, (Mémoire ORSTOM n° 52), Paris, ORSTOM.
- Société Internationale de Linguistique, 1981, *Guide d'orthographe pour la langue Dan (dialecte blo -wo)*, Abidjan, Société Internationale de Linguistique.
- Tabmen, George Wowoa W., 1971, *Gor and gle: Ancient structure of government in the Dan (Gio) tribe*, Monrovia, mimeograph.
- , 1974, "Death ("ga") in Dan culture: Concepts, ceremonies and folklore concerning death in North East Liberia", *Ethnologische Zeitschrift Zürich*, 2.
- Thornton, Robert J., 1980, *Space, Time, and Culture among the Iraqw of Tanzania*, New York, Academic Press.
- Vendeix, Marius, 1924, "Ethnographie du Cercle de Man (Côte d'Ivoire)", *Revue d'ethnographie et des traditions populaires*, 18, 19.
- Whorf, Benjamin Lee, 1941, "The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language", in L. Spier, ed., *Language, Culture, and Personality*, Menasha, Wis., Sapir Memorial Publication Fund.
- Zemp, Hugo, 1971, *Musique Dan: La musique dans la pensée et la vie sociale d'une société africaine*, Paris, Mouton.